

午前八時三十分。

都心の超高層ビルの最上階に位置する社長室は、下界の喧騒とは無縁の静寂に包まれている。全面ガラス張りの壁の向こうには、ミニチュアのように小さく見える街並みが広がっている。

私はいつものように、波多野社長が出社する十五分前にこの部屋に入り、空気を入れ替え、デスクを整えた。

（コーヒーの温度は八十度、タブレットの充電は完了。……よし、完璧）

定刻。重厚な防音扉が音もなく開き、長身の影が滑り込んできた。

波多野有我。二十九歳にして数々のITベンチャーを成功させた人物。

彼はラフな高級シャツの袖をまくり上げ、圧倒的な存在感を放ちながらデスクへと歩み寄った。

「おはようございます、波多野社長」

「ああ、おはよう。……今日のコーヒーは少し香りが強いな。豆を変えたか？」

「はい、今朝の気温に合わせて、少し深煎りのものを選びました」

「いい判断だ」

「ありがとうございます」

窓から差し込む淡い光が、その端正な横顔を照らす。無駄のない輪郭に、均整の取れた目鼻立ち。切れ長の瞳は感情を映さず、ただ冷たく鋭く、見る者の内側まで見透かすようだった。

(……今日もかっこいい。……じゃなくて！今日の社長、いつも以上に目が鋭い気がする。……こういう日は無理難題が多いんだよね……)

私がコーヒーを差し出すと、彼はそれを一口すすり、デスクの上に一冊のファイルを置いた。

「この資料に目を通してくれ」

「あ、はい。……これは……アダルトテック部門の、四半期報告書……ですか？」

「そうだ。見ての通り、芳しくない。特に期待されていた新型ローターの売上が、予測を大幅に下回っている。これは我が社にとって、看過できない経営課題だ」

「は、はい……。そうですね……」

私は社長の圧に冷や汗をかきながら、データに目を走らせた。

製品自体は素晴らしいはずだ。洗練されたデザインに、柔らかく肌に馴染むシリコン素材。

さらに、新型モーターによって、振動を五段階まで変えられる機能まで備えている。

(……絶対に気持ちいいし、売れると思うんだけどなあ……)

とはいえ、この製品を使ったことはない。

自社製品を買うのはなんだか恥ずかしく、結局は

別のメーカーのものを選んでしまっている。

「製品自体のクオリティは完璧だ。だが、決定的な何かが欠けている。……わかるか？」

「え、ええと……。マーケティングの不足、でしょうか？」

「違う。欠けているのは、実際の使用感に基づいたレビューだ」

波多野は不意に、デスクの引き出しから漆黒の小箱を取り出した。ベルベットのクッションに収められていたのは、滑らかな曲線を描くピンク色のローターだった。

「……これを、君に使う」

「……え？ これは……」

「さらにパワーアップした新型だ。君には今から新型のテストをして、レビューを考えてもらう」

「し、新型のテスト……」

（そ、それって……私がこれを使うって何！？ し

かも、今から！？)

頭が真っ白になった。

社長が何を言っているのか、理解するのに数秒かかった。理解した瞬間、全身の血液が沸騰したように熱くなる。

「なっ、何を仰っているんですか！ そんな、そんな破廉恥なこと、できません！」

「破廉恥？ 心外だな」

波多野社長は笑みを浮かべ、椅子から立ち上がった。

彼はゆっくりと、獲物を追い詰める肉食獣のような足取りで私に近づいてくる。私はたまらず後ずさったが、すぐに壁に背中が当たった。

(ち、近い、近すぎるって……！ 波多野社長の香水の匂いが、脳まで痺れさせるみたい……)

壁際まで追い詰められた私の目の前で、波多野社長の手が壁を打った。逃げ場を塞がれ、彼の体温が伝わってくるほどの距離。

彼の低い声が、脳の芯まで痺れさせる。

彼は私の耳元に顔を寄せ、低い声で囁いた。

「これは低迷する事業を立て直し、会社の未来を守るための立派な『業務』だ。君は、自分の感情を優先して、会社の損失を見過ごすというのか？」

「そ、それは……っ」

「もちろん、特別報酬はきちんと支給しよう」

「で、ですが……っ！」

「私の最も近くにいて、私の意図を完璧に汲み取れる有能な秘書である君に、やってほしいんだ」

その鋭い双眸に見つめられると、蛇に睨まれた蛙のように、喉の奥が震えて声が出なくなる。

（ず、ずるいよ……。そんなこと言われたら、断れ

なくなっちゃう……！)

「……返事は？」

波多野社長の指先が、私の顎をくい、と持ち上げた。

強制的に視線を合わせられ、私は逃げることも許されない。

「……………は、い。……承知、いたしました。……波多野社長」

絞り出すような私の答えに、波多野は満足げに目を細めた。

彼は小箱からピンク色のローターをつまみ上げ、私の目の前で弄んでみせた。

「いい子だ……♡ よし、では早速君に使用していきましょう」

その言葉の意味を理解した瞬間、おまんこの奥がキュッと締まるような感覚に襲われた。

「さて……。まずはデータの精度を上げるための『準備』が必要だな。こちらへ来い」

波多野社長が顎で示したのは、部屋の隅にある重厚な黒革の応接用ソファだった。私はふらふらとした足取りでそこへ向かった。

（本当に、今からここでやるの……？ 誰か来たら……っ。でも、社長の『決定』は絶対だし、やるって言ったし……）

ソファの沈み込むような感触が、余計に私の不安を煽った。

波多野社長は私のすぐ隣に腰を下ろした。

「緊張しているな。これだと正確なデータが取れないかもしれないな」



「そ、それは……、こんな状況で、緊張しないわけが……っ」

「そうだな……。ではこうしよう」

波多野社長の長く節くれだった指先が、私のブラウスの第一ボタンに掛かる。パチッ、と小さな音がして、ボタンが外されていく。

「あ、あのっ……」

パチッ、パチッと、リズム良くボタンが弾かれていく。胸元がはだけ、冷たい空気が肌を撫でるたびに、私は恥ずかしさで身を縮めた。けれど、波多野社長の鋭い視線がそれを許さない。

「最初に準備をして、リラックスした状態で機械を使うことにしよう」

「リ、リラックス、ですか……」

「そうだ」

ブラウスが左右に割られ、白いレースのブラに包まれた私のおっぱいが露わになった。波多野社長は、感心したように目を細めた。

「……美しい肌だ。白の下着もよく映える。少し脱がせるのがもったいないくらいだ……。だが、今日はテストのためだからな」

波多野社長の指先が私の肩に触れた瞬間、心臓が口から飛び出しそうなほど激しく打つ。

（やだ……。本当に脱がされるの……。？ 会社の、社長室で、ブラウスだけじゃなくて、下着まで……っ）

私の戸惑いなんてお構いなしに、彼の長く節くれだった指が、ブラウスの隙間から背中へと回り込んだ。指先が私の肌をゆっくりと這う。その感触があまりにも生々しくて、冷房の効いた室内なのに、触れられた場所だけが火傷しそうなくらい熱を帯びて